# Dionysus の 研 究 (3)

---- W. Pater の Denys l'Auxerrois 小論 ----

## 斎藤和 夫

### 1. はじめに

1876年12月の The Fortnightly Review に W. Pater が「A Study of Dionysus」を発表してから約10年を経て、1886年10月に同じ誌上に「Denys l'Auxerrois」を載せた。このDenys なる人物は、後で述べるように Dionysus 神を Imaginary portrait という Pater 独自の表現形式で人格化したものであるが、かれの前作が学究的色彩の濃い神話的宗教論と芸術思想論を兼ねたものであるに対して、後者はこの異教の豊穣神をひとりの青年として人格化することによって、この神が自分の身近に居たかも知れないという親近感の強い作品となり、Pater の Dionysus に対する関心が客観的考察を脱していることの証左といえるものになっている。

本小論では、この2作の相関のもとに、かれの Dionysus 観が Denys なる人物のなかにどんな形で結晶していったかを 辿りながら、 かれのこの作品から Pater の関心の2つの独自な性格を析出して見たい。

## 2. The Study of Dionysus から Denys へ

この2つの作品が同一人による同一神性を対象にしたものである以上,その内容と構成が同一の基盤をもつことは疑いない。 まして Pater の独自性が尚更この2作を紛れなく共通の個性を与えている。両者の共通性は 3. に於てやや詳しく記すとして,ここで特に重要な2点を挙げておきたい。

その 1 は、Dionysus について 語る時、 読む者を 夏の陽光が与える 熱と豊かで 情冽な水と が織りなす(前作の語を借りれば fire と dew とが 織りなす)一種独得な 感覚の世界に 誘う Pater 独自の感覚的手法である。 前作では、 それは 主として Giorgione の Fête Champêtre (日本名: 田園の奏楽、ルーヴル美術館蔵)を介してなされている。

And who that has ever felt the heat of a southern country does not know this poetry, the motive of the loveliest of all the works attributed to Girgione, the Fête Champêtre in the Louvre; the intense sensations, the subtle and farreaching symbolisms, which, in these places, cling about the touch and sound and sight of it? Think of the darkness of the well in the breathless court, with the delicate ring of ferns kept alive just within the opening; of the sound of the fresh water flowing through the wooden pipe into the houses of Venice, on summer mornings; of the cry Acqua Fresca! at Padua or Verona, when the people run to buy what they prize, in its rare purity, more than wine, bringing pleasures so full of exquisite appeal to the imagination, that, in these streets, the very beggars, one thinks, might exhaust all the philosophy of the epicurean. (1)

後者にあっては、物語りの舞台となる Auxerre の町へ旅する筆者の眼前に繰り広げられる 真夏の Champagne 平原の町々、とくに Sens の町の陽光溢れるなかに拡がる葡萄園と古びた 教会や寺院、それらに清澄感を与える河川の風景によって与えられる。Auxerre の町でもこの 川の風景が展開する。(読者はこの物語を読むあいだ、常にこの川のせせらぎを心耳で聴いているべきであろう。)

In harmony with the atmosphere of its great church is the cleanly quiet of the town, kept fresh by little channels of clear water circulating through its streets, derivatives of the rapid Vanne which falls just below into the Yonne. The Yonne, bending gracefully, link after link, through a never-ending rustle of poplar trees, beneath lowly vine-clad hills, with relics of delicate woodland here and there, sometimes close at hand, sometimes leaving an interval of broad meadow, has all the lightsome characteristics of French river-side scenery on a smaller scale than usual, and might pass for the child's fancy of a river, like the rivers of the old miniature-painters, blue, and full to a fair green margin. (2)

第2点は,Dionysus(後作にあっては Denys)をめぐる物語りを Pater の脳裡に結晶させる契機が,この神を人格化した 絵画作品であることである。 前作ではすでに 小論「Dionysus の研究 (2)」 $^{(3)}$  で示したように,Solomon が 1868 年 Royal Academy に出品した Bacchus が Pater の想像力を触発したのであるが,後作では,本文で記したように,「筆者は Auxerre の骨董店で当地の廃墟となった寺院からの出物らしい stained-glass を見つけ,それがシリーズ物の一枚であることから,他の作品の所在を尋ね,近在の牧師の館でこの作品と関わりがあるタペストリーを見せて貰うが,そのなかに描かれている異教的な一人物像を見て想像をめぐらしてこの物語りが生まれた。」 $^{(4)}$  となっている。

絵画彫刻等の視覚芸術の作品から音楽を、そして情感の世界を、さらに情感を具象化する一個の生を生み出す、このような Pater の独得な鑑賞力(はじめに 眼ありき)がこの 2 作でも働いているのである。(この Pater の鑑賞力がかれ独自の印象批評を生み出したのであるが、これはあまりにも個性的な名人芸に近い世界であり、印象批評が批評の方法として普遍化しない要因でもあったのであろう。)

#### 3. Dionysus > Denys

Dionysus と Denys の同一性はつぎの諸点において特に顕著である。

#### (1) 出生をめぐって

Dionysus は地母神 Cemere が Zeus の愛を受けて生まれるのであるが、ある時 Cemere が 夫に本来の姿で訪れるように願ったため雷神である Zeus の光と熱に焼け死に、その時月足らずで Dionysus を生む。

Auxerre の美しい村娘が Auxerre 伯に見染められてその館に入って身ごもるが,貴族の館の華麗さとその妻(神話の Hera に当る)の嫉妬に耐えられず館から逃げ出す途中雷に打たれて死に,その時に月足らずで Denys を生み落とす。

#### (2) 若い日の住まい

Dionysus が Hera の追求を逃れて住んだ隠れ家は Nysa の山中であったが、Denys は葡萄

園の下方の崖際の小屋である。(このあたりからすでに葡萄との親縁性が暗示されている。)

#### (3) 魔術的魅惑

Dionysus は常にその廻りに熱狂的な巫女達 (Bacchae) を従える。女性を魅惑し狂わせる神である。 その魔術的魅惑は Euripides の「バッカスの巫女達 (The Bacchae)」 でよく表現されている。

Denys も荘重な儀式を陽気な騒々しい祭りに変え、(6) また女性をその魅力のとりこにするばかりか、彼を見る人を老若男女を問わず魅きつける。

And from the very first, the women who saw him at his business, or watering his plants in the cool of the evening, idled for him. The men who noticed the crowd of women at his stall, and how even fresh young girls from the country, seeing him for the first time, always loitered there, suspected—who could tell what kind of powers? hidden under the white veil of that youthful form; and pausing to ponder the matter, found themselves also fallen into the snare. The sight of him made old people feel young again.<sup>(7)</sup>

## (4) 自己破壊と再生の祭りの主役

「祭りは人間を,構造と規範のない世界,ただ id の力だけが,覆滅の大いなる切望だけがはたらく自然の世界に当面させる。それはみずからを破壊し,その灰燼から蘇える。……これまでなかった人間関係や,意識と感情の融合が,すべての規範と構造にとって代わる。人間は不可能なこと——あらゆる空間や持続と関係のない共通の伝達,破壊と性に対して直面すること——を実現するのである。[69]

日常性のなかに投影された自己を破壊し、いったん大地に帰したのち、再び蘇えること――これは人間の生に於ても見られるが――特にわれわれの意識に具体的に現われるのは、作物の収穫をめぐる一連の循環を一旦切断しながら連続の契機となる豊穣儀礼とそれに伴なう祭りである。日常性はここでは許されず、日常性のなかに居る人種から見ると眉をひそめたくなるような野卑と騒乱、無秩序の世界が現出する。そしてそこでは必ず記号の大量消費――あくなき飲食と性の消費が現出する。その祭神が葡萄とその酒の神 Dionysus とあれば、その祭りは典型的なものとなろう。この情景を Pater はつぎのように記している。

The people of the vineyard had their feast, the little or country Dionysia, which still lived on, side by side with the greater ceremonies of a later time, celebrated in December, the time of the storing of the new wine...The travelling country show comes round with its puppets; even the slaves have their holiday; the mirth becomes excessive; they hide their faces under grotesque masks of bark, or stain them with wine-lees, or potters' crimson even, like the old rude idols painted red; and carry in midnight procession such rough symbols of the productive force of nature as the women and children had best not look upon; which will be frowned upon, and refine themselves, or disappear, in the feasts of cultivated Athens.<sup>(9)</sup>

いっぽう Denys が生きていた 13 世紀のフランスは,ちょうど封建領主に支配されている閉鎖社会の解放を求める 個人の意識変革の 時代となり, 民衆の energy と 潜在的な変革願望が feast に集約された時と設定され,Denys がその主役となる。

For in truth Denys at his stall was turning the grave, slow movements of politic heads into a wild social license, which for a while made life a stageplay. He first led those long processions, through which by and by "the little people," the discintented, the despairing, would utter their minds. One amn engaged with another in talk in the market-place; a new influence came forth at the contact; another and another adhered; at last a new spirit was abroad everywhere. The hot nights were noisy with swarming troops of dishevelled women and youths with red-stained limbs and faces, carrying their lighted torches over the vine-clad hills, or rushing down the streets, to the horror of timid watchers, towards the cool spaces by the river. A shrill music, a laughter at all things, was everywhere. (10)

祭りから連想されるのは、Nietzsche が Also Sprach Zarathustra に於て、人間が自己超克をして超人への道に向かう moment として「乱舞」するあたりである。 かれの意識のなかに「悲劇の誕生」以後つねに Dionysus が住み、 つねにかれの 思索とともに 成長し、Christ と全く対極にある神、 すなわち God が 死んだあとの 神即超人となるに 至ったのであろう。 Nietzsche が発狂直前を自分は Dionysus だと名乗ったといわれるが、 この時までの彼の意識の底にあるものがうかがわれるのである。

Denys が Auxerre でこの祭りの主役であった時は、すべての作物なかんずく葡萄が奇跡的なほど豊かに稔り、冬の訪れがないかに見える黄金時代であったとされる。 これも Nietzsche の「真昼」に該当するのであろうか。しかし、真昼は次の瞬間から黄昏どきへと進む宿命にあるように、たわわな収穫の秋も冬の前触れであるという宿命は避けられない。

## (5) 異形のものを愛する神

この Auxerre の祭りを頂点として Denys に暗い影がさし始める。まず彼は異形のものを愛し身の廻りに従える不吉の者として疑惑と憎悪の対象となる。

When his trouble came, one characteristic that had seemed most amiable in his prosperity was turned against him—a fondness for oddly grown or even mishappen, yet potentially happy, children; for odd animals also: he sympathised with them all, was skilfull in healing their maladies, saved the hare in the chase, and sold his mantle to redeem a lamb from the butcher.... It was the first of many ambiguous circumstances about him, from which, in the minds of increasing number of people, a deep suspicion and hatred began to define itself.<sup>(11)</sup>

Denys に従う野獣のうちとくに狼は、冬の Dionysus が「貪り喰う者 (the devourer)」として狼を連想させるのとつながる。豊穣神はそのまま不毛をもたらす神であり、人間はその機嫌を害うのを恐れて生贄を捧げる風習が生まれ、その生贄は生きた幼児から仔山羊へと進んでも、その残酷性の観念が残ったのであろうか。(穀神 Demeter もその娘を Hodes に奪われて悲しみと怒りで穀物を不毛にしたことがある。)

Pater はこのような野獣と Denys との親近性を Dionysus の名を巧みに避けながらこの神の一側面と結び付けている。

The incident suggested to the somewhat barren penmen of the day...a stage play in which the God of Wine should return in triumph from the East.(12)

野獣や異形の小動物あるいは半ば獣化した人間(Satyrus, Pan などを連想させる)に対する親和感は、Tiziano の「バッカス と アリァドネ」<sup>(18)</sup> などの絵画でバッカスの従者達の姿に表わされている。

#### (6) 漂泊する者

Dionysus は神話のなかで「漂泊者」あるいは「航海する者」の側面を示すことがある。

Hera によって発狂させられ、インド、エジプトなどを漂泊し、癒えたあと Nysa~Thrace (ギリシャ北部地方、今なお Dionysus の祭りの原始形態が残っている)を経て Thebes に南下し(ここでは例の Euripides が劇化した伝説を残している) ついに Attica に入って来、その都会性のなかで 悲劇の神に変容したとされる。 またこの神は Naxos 島と関わり深いらしく、ある船がディア島で美しい少年を乗せて、その少年の要求する Naxos に行かずエジプトで奴隷に売ろうと船を変針させたところ、船の帆柱に葡萄の蔓が果実を重くつけて巻き付き、驚き恐れた船員達が海中に飛び込んだところ海豚に変った話もある。またアジアの遍歴は葡萄などの栽培を教えるためだともされている。Denys の次の行為はこのあたりとつながる。

It was on his sudden return after a long journey (one of many inexplacable disappearances), coming back changed somewhat, that he ate flesh for the first time, tearing the hot, red morsels with his delicate fingers in a kind of wild greed. He had fled to the south from the first forbidding days of a hard winter which came at last. At the great seaport of Marseilles he had trafficked with sailors from all perts of the world, from Arabia and India, and bought their wares, exposed now for sale, to the wonder of all, at the Easter fair—richer wines and incense than had been known in Auxerre, seeds of marvellous new flowers, creatures wild and tame, new pottery painted in raw gaudy tints, the skins of animals, meats fried with unheard of condiments. (14)

### (7) Denys をめぐる人々の名

民衆の疑惑と白眼視のなかで発狂した Denys は Ariane 夫人によってその父老伯爵の養子にされようとする。

The lady Ariane, deserted by her former lover, had looked kindly upon him; was ready to make him son-in-law to the old count her father, old and not long for this world. (15)

この物語りは明らかに Naxos 島で Theseus に捨てられた Ariadne と Dionysus との結婚の神話をモチーフにしたものである。

また Denys を愛し保護していた修道僧 Hermes の名は,原神話においても Pater のつぎの文によって Dionysus との親近性は明らかである。

...and that Hermes, the shadowy conductor of souls, is constantly associated with Dionysus, in the story of his early life, is not without significance in this connexion.<sup>(16)</sup>

#### (8) 冬の Dionysus

Dionysus が葡萄生産地帯の陽気な乱痴気騒ぎの好きな神から、Attica に入ってから都市的

環境のなかで悲劇の神となり、冬の北方地帯では飢え渇く神――生贄を求めて貧り喰う狼の如き者――に変貌する経緯を Pater は詳述し、

He is twofold then—a Deppelganger; like Persephone, he belonged to two worlds, and has much in common with her, and a full share of those dark possibilities which, even apart from the story of the rape, belong to her.<sup>(17)</sup>

と規定する。この二重性は、甘さが過ぎて苦いものに変る葡萄酒そのものの二重性、酒に酔い 浮かれ騒いだあとの形容し難い悲哀感の二重性と重ね合わせることも出来よう。

Denys もまたこの二重性を呈する。 祭りの主役となり Auxerre の解放運動の先頭に立った Denys は不毛の季節の到来とともに、それをもたらした不吉の者、悪魔の化身として忌み嫌われる存在となるのである。

## (9) 八つ裂きにされる者

Dionysus 神話と「八つ裂き」説話とは関連が深い。Thebes では Pentheus が母の手で八つ裂きにされ (Bacchae), その反対に、Dionysus は 父 Zeus の 留守中に Titans によって八つ裂きにされる (Nietzsche は Die Geburt der Tragödieでこの物語りを Dionysus の重要な側面としてとらえている) などであるが、J.G. Frazer はこの物語りを次のように解釈して農耕社会の豊穣儀礼の名残りと考えている。

Such tradition points to a custom of temporarily investing the king's son with the royal dignity as preliminary to sacrificing him instead of his father. (18)

Denys の死もまさしくこのような荒々しいものであった。豊穣の黄金時代が過ぎ,冬のような毎日が続き,季節が夏であるにも拘わらず暗くつめたい雨が降り続く。これを招来したのはDenys の魔法だと人々は彼を殺すことを計画する。折しも Auxerre の町は未来の領主を迎える日に,「冬を象徴する人物を眼隠しさせて追い廻す」芝居をすることになる。(この習慣は仮空のものではなく,今でもスイスやドイツの山間部で行なわれている)この時に以前祭りの主役であった Denys はもう一度主役になろうと飛び出して行き,怪我をして血を流す。 これを見た群衆は一種狂暴な精神状態に陥いり, Denys の身体は引き裂かれ, あちこちに 放り投げられ,原形を止めぬまでになる。翌日かれの心臓が見知らぬ人によって Hermes に届けられ,大寺院の側廊の片隅に葬られる。このあたりは Frazer のつぎの記述と似ている。

In his rage, Jupitor(Zeus) put the Titans to death by torture, and, to soothe his grief for the loss of his son, made an image in which he enclosed the child's heart, and then built a temple in his honour. (19)

ここまで概略記したように、Pater は Dionysus 神話を丁寧になぞりながら Denys の性格 と行動とを組み立て、ギリシャ神話を連想させながらその焼き直しの印象を避けて細心に imaginary portrait を描いたものである。

## 4. Denys に見られる Pater の中世観

歴史―とくにヨーロッパの文化史―を見る視点はふたつあるように思われる。その1は、ギリシヤ・ローマ時代―キリスト教会(ローマ教会)の時代―文芸復興―啓蒙―現代 という形で文化思想が裁然と時期的に区分される見かたであり、他の1つは、そのいずれの思想もつねに人間の心裡に存在しているもので、時代の表層流であるか底流であるかによってその時代が特性づけられるという考え方である。前者が教条的であるとすれば後者は民俗学的とも謂えよう。

Pater は Denys の生きていた時代と場所を 13 世紀のフランス農村に設定した。このことは偶然ではなく、これによってギリシャ神話(異教的な民間信仰)を中世という空白期ののちに現代に再生させるのではなく、ギリシャ・ローマ神話―中世の隠れた民間伝承―現代における再生、の図式によって自分の民俗学的歴史観を表わしたのだと言い得る。

このような彼の歴史観は脈絡なく突如として Denys l'Auxerrois に現われたのではなく,これに先行する Pater のいくつかの論説にすでに見られるものであり, The Study of Dionysus に於ても次のように 神話と中世キリスト教との 親近性あるいは 連続性を暗示しているのである。

Obscure as are those followers of the mystical Orpheus, we yet certainly see them, moving, and playing their part, in the later ages of Greek religion. Old friends with new faces, though they had, as Plato witnesses, their less worthy aspects, in certain appeals to vulgar, superstitious fears, they seem to have been not without the charm of a real and inward religious beauty, with their neologies, their new readings of old legends, their sense of mystical second meanings, as they refined upon themes grown too familiar, and linked, in a sophisticated age, the new to the old. In this respect, we may perhaps liken them to the mendicant orders in the Middle Ages, with their florid, romantic theology, beyond the bounds of orthodox tradition, giving so much new matter to art and poetry. (20)

Renaissance に収められた winckekmann に関する章中のつぎの文はさらに明確である。

Still, the broad foundation, in mere human nature, of all religions as they exist for the greatest number, is a universal pagan sentiment, a paganism which existed before the Greek religion, and has lingered far onward, into the Christian world, ineradicable, like some persistent vegetable growth, because its seed is an element of the very soil out of which it springs. (21)

この引用文ばかりでなく、これに似た感慨が序言から終章までの所々に点在し、またルネサンス研究と銘打ちながら中世の文学作品もここに盛り込まれている点などを考え合わせると、どうもこの作品は彼の民俗学的歴史観を basis にしたと言うよりも、これを芸術評論の形で主張しようとしたのだと思えるふしがある。その視点から見ると Dionysus を再現・人格化した Denys を中世に置いたのはむしろ必然的だったと言い得る。

W. Pater はその評論集の序言あるいは結びで自分の作品の main theme を告白することが間々あるが、Denys でもその終り近くで次の感慨を漏らす。

To me, Denys seemed to have been a real resident at Auxerre. On days of a certain atmosphere, when the trace of the Middle Age comes out, like old marks

in the stones in rainy weather, I seemed actually to have seen the tortured figure there—to have met Denys l'Auxerrois in the streets. (22)

乾燥時に眼に見えない石の紋様が雨の日にくっきりと浮かび上がるように、中世的精神風土のなかで Dionysus に代表されるような異教的民俗信仰が眼に見えるか見えないぐらいの淡い紋様で民衆の心の中を染めていることを Pater は その鋭敏な感覚で 感じ取っているようである。そしてこの引用文は Auxerre の町に現在佇んでいる Pater 自身を通じて Denys を一すなわち Dionysus を一現代に引き寄せようとしているのである。

Pater のそれに似て、表面はキリスト教で染め上げられた中世社会の底流に古代ギリシャ・ローマの神話的宗教が(細々ながら)確かに存在していたとする思想には、既に先達の人達が居た。 Heinrich Heine の「流刑の神々」(28) はこの民俗学的歴史観に拠って書かれたものであるが、とくに Dionysus に関する伝説にはこの小冊子のうちかなりのスペースを割いている。 概略を記すと、

「チロル地方の森に囲まれたある湖の岸辺にひとりの若い漁師が住んでいた。かれは対岸への渡し守の役もしていたが,ある秋分の日の夜半に3人の坊さんが来て2,3時間釣舟を貸して呉れと頼む。坊さん達は沖に漕ぎ出し約束通り2,3時間して戻って来,礼金を渡してあっという間に立去ってしまう。この時坊さんの手に触れた漁師は何とも言えぬ悪寒を感じる。翌年から秋分の夜になると同じことが繰り返される。不審でたまらなくなった漁師はこの3人の坊さんの正体と行先を探ろうと,舟に積んである魚網の下に隠れて同行すると,森の中の空地に蒼白い顔をした若い男女が数百人群れていて,この3人の坊さんを歓声をあげて出迎える。3人のうちのひとりは(漁師にはその知識がなかったが)まさしく Dionysus で,他のふたりは太った好色そうな化物(サテュロス・ファウヌス)であった。この森でバッカス祭が繰り広げられるのである。恐れおののいた漁師は再び網の下に隠れて待つうちに坊さん達が戻って来て再び湖を渡ってもとの岸辺に戻る。うまく舟から脱け出た漁師はずっと木陰で待っていた振りをする。

翌日漁師は自分の霊魂が危険に瀑されていると思って近くのフランチェスカ派の修道院の院長に悪魔祓いをお願いしに行く,話を聴いていた院長の帽子が脱がれた途端にこの院長が昨夜見た魔神だとわかり肝をつぶす。院長に口止めされた漁師は,帰りがけた修道院の倉庫番と料理番の許に寄って食事をさせて貰えと命じられ行って見ると,このふたりが例の魔神の従者達であった。」(24)

ハイネの記したこの説話は各所に伝説として存在しているようだが,修道院の院長や修道僧達がこの異教神と従者達であるのは皮肉である。キリスト教の聖職者といえども偽善と虚飾の皮の下にバッカスを忍ばせているというところなのか。Denys の同情者である修道僧 Hermes はこのあたりとつながっているのではあるまいか。(Pater がハイネのこの文を読んでいたことはおおよそ確実である。)

#### 5. 結 び

既述の如く,「Denys l'Auxerrois」は、その10年前に Pater が発表した「The Study of Dionysus」の Dionysus 観を、中世に身を置くひとりの青年像に結晶させたものであるが、この作品を通じて Pater 独自のふたつの心的傾向を窺い知ることができる。

1つは、3節で触れたように、Pater はこの異教神を語るとき常に水にまつわる清冽な情感

を添えるということである。ともすれば有形化する傾向にある芸術様式を,生本来の性格である流動と変化の相に向かわせる moment として,また生の本質そのものを語るものとして,水を常時意識している Pater の芸術観をその源流として,先達たる Ruskin の次のことばと共振し,当時から胎動していた万物を流動変化止まない生の姿で捕えようとする芸術衝動——Turner の絵画もその一例である——に深い共感を示しているのである。

Of all inorganic substances, acting in their own proper nature, and without assistance or combination, water is the most wonderful. If we think of it as the source of all the changefulness and beauty which we have seen in clouds; then as the instrument by which the earth we have contemplated was modelled into symmetry, and its crags chiselled into grace; then, as in the form of snow, it robes the mountains it has made, with that transcendent light which we could not have conceived if we had not seen; then as it exists in the foam of the torrent—in the iris which spans it, in the morning mist which rises from it, in the deep crystalline pools which mirror its hanging shore, in the broad lake and glancing river, finally, in that which is to all human minds the best emblemof unwearied, unconquerable power, the wild, various, fantastic, tameless unity of the sea; what shall we compare to this mighty, this universal element, for glory and for beauty? or how shall we follow its eternal changefulness of feeling? It is like trying to paint a soul. (25)

20世紀前半の小説文学に特異性を与えた「意識の流れ」もこの引用文の末尾の如く,「水のように変幻極わりない 人間心理を その刻々において 描き切ろうとする 限界的努力」と考え得る。この意味で Ruskin, Pater 達と 20世紀文学との連続性が認められるのである。(Virginia Woolf がその作品で見せる水への obsession は可成りのものがある。)

2番目は、当時は未だ学問として確立していなかったと思うが、現在民俗学の分野とされるべき事象に対して Pater が強い関心を示していることである。もし Pater に「眼の魅惑」すなわち視覚芸術に対する彼ののめり込みが常人程度のものであったら、あるいは彼はグリム兄弟やハイネのように民間伝承探索の道にもっと奥まで踏み込んだかも知れないと推定される。「流刑の神々」の英訳を読んで 柳田国男が日本において 仏教の勢力のかげ邪宗迷信とされていた民間伝承の発掘を志したとされているが、あるいは Pater も Heine を媒介として柳田国男の民俗学と兄弟の学問的業績を発表したかも知れない。

「Denys l'Auxerrois」は以上の2点で小品ながら示唆するところの大きい作品である。

昭和58年9月

## Notes and References

- (1) Pater, W.: The Study of Dionysus, *Greek Studies* (London, Macmillan, 1925) p. 28. 以下では The Study と略記する。
- (2) Pater, W.: Denys l'Auxerrois, *Imaginary Portraits* (London, Macmillan, 1925) p. 50. 以下では Denys と略記する。
- (3) 斎藤和夫: Dionysus の研究 (2) (札幌大学教養部・女子短期大学紀要第 18 号 B) p. 34.
- (4) Denys, pp. 53~54.
- (5) Euripides: The Bacchae, tra. by G. S. Kirk (Cambridge, Cambridge U. P., 1977)
- (6) Denys, pp. 57~58.
- (7) ibid., p. 60.

- (8) Jean Duvignaud, Fete et civilisation, (Japanese) tra. by. Ken Kogarimai (Tokyo, Kino-kuni-ya, 1980) pp 52~53.
- (9) The Study, pp. 21~22.
- (10) Denys, p. 61.
- (11) ibid., pp. 62~63.
- (12) ibid., p. 63.
- (13) ロンドン・ナショナル・ギャラリー蔵
- (14) Denys, pp. 64~65.
- (15) ibid., p. 66.
- (16) The Study, p. 45.
- (17) ibid., p. 44.
- (18) Frazer, G. S.: Spirit of the Corn and of the Wild, The Golden Bough (London, Mac-Millan, 1912) p. 13.
- (19) ibid., p. 13.
- (20) The Study, p. 50.
- (21) Pater, W.: Winckelmann, Renaissance (New York, Boni & Liveright, c 1919) p. 167.
- (22) Denys, p. 77.
- (23) ハイネ,ハィンリッヒ:流刑の神々(日本語訳)小沢俊夫(東京,岩波文庫,1980) この書は柳田 国男訳では「諸神流竈記」という書名である。
- (24) ibid., pp. 130~139.
- Ruskin, John: Modern Painters (Tokyo, Kenkyu-sha,1941) pp. 51~52.